

春だいこんの温度管理について

1 試験のねらい

春だいこんの栽培は年々前進化し、パイプハウスを利用した12月まきも導入されている。しかし、この時期の作型では抽だい回避が栽培上大きな問題である。そこで、昼温管理の違いがだいこんの花芽分化、抽だい及び収量に及ぼす影響を検討し、生育ステージ別昼温管理の目安を明らかにした。

2 試験方法

品種は耐病総太り、春王及び天春を供試した。1月20日にパイプハウス内には種し、ハウス内にトンネルを設け処理を行った。生育ステージ別の昼温管理は表-1のとおり実施したが、天春は花芽分化期が遅れたため、M・H

・MはM・H・Hとした。

栽植距離は畝幅150cm、条間30cm、株間30cmの4条千鳥まきで、施肥量は三要素とも成分量でa当たり1.5kg施用した。試験規模は1区60株2区制で実施したが、花芽分化は7日毎に1回10個体を供試し、収穫は根重800gを目標に3回行った。

表-1 生育ステージ別の昼温管理

処 理	処 理 内 容			
	は種	20日	花芽分化期	収穫期
H・H・H	○	○	○	○
H・M・M	○	○	○	○
M・H・M	○	○	○	○
H・H・M	○	○	○	○
M・M・H	○	○	○	○
M・M・M	○	○	○	○

注 H(○ ○)は35℃、M(○……○)は25℃を目標に換気した。

3 試験結果及び考察

花芽分化期は、耐病総太り及び春王がほぼ同じ時期で早く、天春は25~28日程度遅れた。一方、温度処理間ではは種から中温管理した期間が長いほど花芽分化期は早く、高温管理区は遅れた。

収穫期の判定については表-2に示した。天春は全処理とも収穫可能であったが、耐病総太りと春王はH・M・H以外は収穫不能と判断された。

根重は高温管理した方が劣る傾向を示し、特に生育中期以降の高温管理は根部肥大の低下に大きく影響した。しかし、生育前期は高温管理した方が生育が早まり根重も優れた。品種間では天春の肥大が良好で、ついで春王、耐病総太りの順であった。

中温管理期間が長いほど花茎が長くなったが、花芽分化期以降の高温管理は花茎の伸長を助長した。なお、天春は収穫期に達しても抽だいは認めなかった。

4 摘 要

ハウス春だいこん栽培の生産安定化を図るため、昼温管理の違いが、だいこんの生育、収量に及ぼす影響を検討した結果、昼温はは種後20日間程度は35℃位の高温に管理し、その後は25℃位に低下させるのがよいと考えられる。なお、この時期の栽培では品種は晩抽性の天春が適すると判断される。

(担当者 野菜部 室井栄一※ 平出耕一) ※現黒磯分場

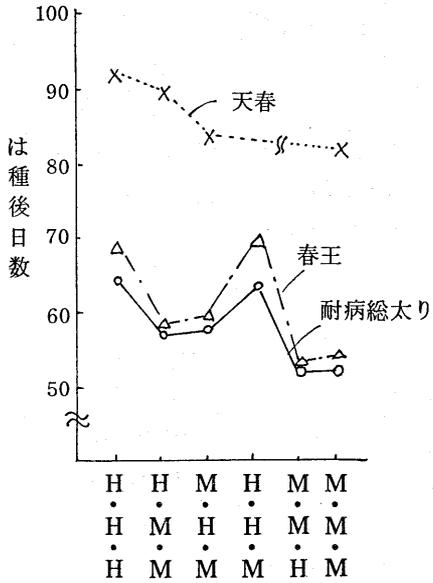


図-1 花芽分化期までの
は種後所要日数

表-2 収穫期の判定

処 理	耐病総太り	春 王	天 春
H・H・H	収穫不能	収穫不能	4.下～5.上
H・M・M	4.中	4.中	4.上～中
M・H・M	収穫不能	収穫不能	4.下～5.上
H・H・M	〃	〃	供試せず
M・M・H	〃	〃	〃
M・M・M	〃	〃	4.中～下

注 収穫不能は花茎長10cm以上で、根重800gに達しない場合とした。

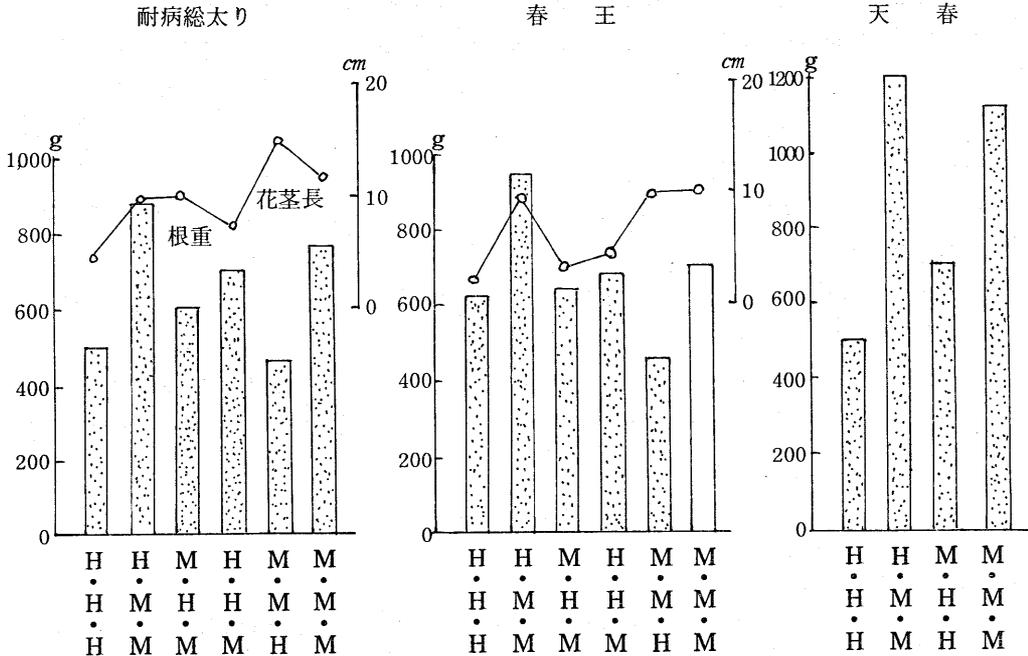


図-2 昼温の違いが根重及び花茎長に及ぼす影響

注 4月19日調査。